

NPO パートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 特定非営利活動法人おはなしころりん

代表者名 江刺 由紀子

1. 事業名

移動こども図書館と交流図書室おはなしサロン事業

2. 事業カテゴリー

夢を応援・東北 NPO パートナー協働事業、通常事業

①被災地の子どもたちの健全な育成と集団移転後のコミュニティー支援

3. 事業期間

2021年4月1日 ～ 2022年3月31日 (365日間)

4. 契約金額

5,000,000 円

5. 担当者名

江刺 由紀子

6. 事業目的

子どもの生きる力を育む「読書活動の推進」、読書を通じた地域住民の多世代間交流により子どもが安心して過ごせる「居場所づくり」を行う。子どもの健やかな成長をサポートし、子どもを見守る住民を結ぶ「地域のつながり活性化」を目指すことで、未来につづくより良い地域社会をつくる。

7. 事業の成果

数値的な評価指標に沿った報告およびアウトカムは以下のとおり。

○学校支援活動・軒下古本市

- ・大船渡市内5・6年生対象読書状況アンケート調査において「本を読むのがとても楽しい」「どちらかという楽しい」の合計が90%以上とする。※88.5%で目標に達しなかった
5年生：88%（前年度は94%、前々年度は94%）
6年生：89%（前年度は89%、前々年度は93%）
- ・大船渡市内5・6年生対象読書状況アンケート調査において、1か月の間に読んだ本の冊数が0冊である生徒をなくす。※2%あり目標に達しなかった
5年生：3%（前年度は1%、前々年度は2%）
6年生：1%（前年度は2%、前々年度は1%）
- ・教室で、授業などの合間に、気軽に読書を楽しむことができた。コロナ対策で三密を避けながら、本との出会いの機会を得、かつ、好きな本を手に入れることができ、家での読書が充実した。それによって、読書活動への興味や関心が膨らみ、豊かな人間形成に役立てた。

※アンケート調査結果、以下のとおり（抜粋）

選書がいい（発達段階に応じた本、学校図書室にない本、様々なジャンル、良書、季節感のある本）
いろいろな本との出会いがある。学習に関連する本があるので学びが深まる。すぐに手に取れる環境づくり。リクエストができる。おすすめ本紹介の「ころりん新聞」で興味が広がる。子どもたちが楽しそうに本を読む姿が多くみられる。等

○子どもたちの学習環境の好転を図るために必要な研修会等について

・スタッフが研修会へ積極的に参加、または自主企画した

※参加研修会数：7回 参加スタッフ延べ人数：26人

・スタッフが SNS で活動の情報を発信し、その発信回数を月4回以上とする

※89回で目標に達した 【参考】前年度：75回、前々年度：27回

○利用者数の維持（移動こども図書館事業全体）

・目標のべ人数 子ども 16,800人、大人 580人

（平成29年度：子ども 17,793人、大人 1240人、平成30年度：子ども 15,928人、大人 511人、令和元年度：子ども 16,784人、大人 575人、令和2年度：子ども 15178人、大人 432人）

※今年度：子ども 18523人、大人 424人 子ども人数は目標を大きく超えたが、大人数は目標に達しなかった

・軒下古本市の目標のべ人数 子ども及び大人 650人

（令和2年度5月から1月までで598人）

※今年度：813人で目標を上回った

○おはなしサロン利用者数の維持

・図書の貸出冊数の目標 240冊

（平成29年度：349冊、平成30年度：139冊、令和元年度：239冊、令和2年度：135冊）

※今年度101冊で、目標を大きく下回った

・来室者数の目標のべ人数 1700人

（平成29年度：1654人、平成30年度：1510人、令和元年度：1741人、令和2年度：1119人）

※今年度1137人で、目標を下回った

・来室者は一定数の高齢者が頻繁にきてくつろぐなど、地域の身近な居場所としてますます定着が進んだ。

・小学生の来室が減っているが、乳幼児を連れた母親が集うようになった

・3月16日の福島県沖地震で被害を被り、3週間の閉室を余儀なくされたが、閉室中に200人に上る方々から支援が寄せられ、地域に必要な場所として求められていることが明確にわかったところとなった。

8. 事業種別（コンポーネント）ごとの成果

(1) コンポーネント①

移動こども図書館事業に係る受益者の反応は総じて良く、地域全体から一定の評価をいただいているのがわかる。それは、日々寄せられる声や関係機関との良好なつながりなどによって認識できる。スタッフ一人ひとりが築いてきた住民個々との親密な関係性が、団体全体の好印象を呼び寄せたものと受け止められる。

読書を習慣として楽しむ住民、乳幼児から高齢者までが当事業を利用し、暮らしに潤いをもたらしている。特に子どもたちは、読書を楽しみ、興味関心を広げ、知的満足感を得て、豊かな人間形成の一助となっていると思われる。

1) 図書貸出活動

・大船渡市内全11小学校（各学校毎月1回、各クラス30～34冊ずつ）

参加延べ生徒数：15681人（昨年度12543人、25%増）

貸出図書冊数：29135冊（昨年度23088冊、26%増）

- ・大船渡市内および陸前高田市内の子育て支援団体等13カ所（各所毎月1回）

参加延べ人数：大人122人（昨年度57人、2.14倍）

子ども1570人（昨年度1670人、6%減）

貸出図書冊数：2246冊（昨年度2025冊、11%増）

- ・災害公営住宅・地域集会所・公民館・高台移転先等18カ所（各所毎月1回）

参加延べ人数：大人302人（昨年度375人、24%減）

子ども1272人（昨年度965人、32%増）

貸出図書冊数：1286冊（昨年度1097冊、17%増）

差し上げ本冊数：616冊（昨年度725冊、18%減）

2) 評価・検証委員会

- ・計画通り年3回開催（うち1回はコロナ感染拡大防止策で書面開催）

第1回：5月27日(木)年度計画、意見交換

第2回：11月26日(金)進捗状況、今後の活動

第3回：2月25日(金)アンケート結果報告、一年のまとめ（書面開催）

3) 軒下古本市

- ・弊団体の事務所前にて、平日9:00-16:00設置

- ・参加延べ人数：813人（昨年度739人、10%増）

差し上げ本冊数：1573冊（昨年度1615冊、3%減）

4) 子どもたちの図書環境の好転を図るためのスタッフ研修

- ・自主：報告書等の書き方勉強会4月23日(金)事務所 参加5名

- ・県教委：子どもの読書活動推進会議5月14日(金)大船渡市民文化会館 参加4名

- ・自主：パソコン教室5月25日(火)事務所 参加4名

- ・県教委：読書ボランティア研修会6月15日(火)事務所 参加1名

- ・県教委：読書ボランティア研修会11月8日(月)三陸公民館 参加5名

- ・自主：自団体の現状と今後の見通し1月24日(月)事務所 参加5名

- ・県社協：暮らし支えるボランティアの集い3月9日(水)事務所 参加2名

(2) コンポーネント②

交流図書室おはなしサロンは、住民誰もの居場所として地域に認知されている。午前中の時間帯は高齢者が多く、午後は乳幼児と保護者の利用で定着している。転勤で当地にやってきた方々には、不慣れな土地での情報収集や友達作りに役立っている様子である。コロナ禍となってから、イベントの開催は控えているが、それにもかかわらず一定数の来室者が維持できているのは成果のひとつと考える。

- ・毎週4日間(月火金土)10:00-15:00 コロナ禍対策をしながら開室

- ・来室者数：大人1029人（昨年度982人、5%増）

子ども108人（昨年度135人、25%減）

貸出図書冊数：101冊（昨年度135冊、34%減）

差し上げ本冊数：1187冊（昨年度2576冊、46%減）

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

「移動子ども図書館事業」は東日本大震災直後の平成23年5月から復興支援と読書活動推進を目的にして、

継続的に事業を地域に浸透させてきた。平成 27 からは岩手県教育委員会の委託事業として 6 年間の実績がある。また、「交流図書室おはなしサロン」は開室 7 年目の現在も地域に親しまれ、子どもと住民の居場所として認知されている。

地域への定着性とニーズに沿った活動という点から、事業継続への地域からの期待は大きい。そのようななかでも「移動こども図書館」および「交流図書室おはなしサロン」を息の長い活動にするには、財源の確保が今後の最大の課題となる。経験が蓄積された有能な人材、地域に浸透した活動場所、この 2 点については今後も心配がないのだが、活動資金がなくては事業がおこなえない。その課題解決の模索が続いている。

具体的な資金調達活動として現在は、税制上の優遇措置があることで寄付金を集めやすくなる体制、つまり認定 NPO 法人へのステップアップを目指している。条件のひとつ、正会員 100 人以上については、1 月下旬時点で正会員 44 人であった人数を、4 月には 123 人に増やすことに成功した。今後も増やしていく計画である。そして、認定 NPO 法人になったあと、企業や団体に積極的働きかけをおこない、寄付金を確実に増やしていきたい考えである。

10. 協力体制の構築

協力体制にあたっては、今まで連携していた関係各所とのつながりがより親密になることができた。地域行政、市民活動団体、個人にまでわたり、より良い関係性を築けたことは、今後の活動の拡充に大事な要因になると考える。

協力体制の持続性については、各所から今後の連携の希望が寄せられていることから、続くものと確信している。協力関係にとどまらず、新たな活動への展開などの可能性も今後模索していく。

11. Civic Force との協働について

今回の協働では、大きな活動資金をこちらの希望に沿って使わせていただけたことが何よりありがたいことだった。年度途中で不足の予算分を補助金申請したため、当初提出した CF 協働事業分の予算内容の見直しでも便宜を図っていただき、たいへん助かった。

メリットは、CF を通じての発信と弊団体の運営力がアップしたこと。CF の広報力は私どもにはまったく及ばないものですので、今回協働することで広く発信することがかなったと思っている。また、毎月の活動報告書の作成では、指摘されなければ今まで気づかなかった様々な点を見直すことができた。そのなかで、具体的な文章作成の指導のみならず、活動の在り方や今後の方向性などについてのご助言までいただいた。協働という形の伴走をしていただいた一年だった。ありがとうございます。

デメリットと言えるものは、特になかった。